

# 破滅とのたたかい

教育目的としての人間についての一考察

中村新十郎

**A Battle against Destruction**

**A Study on Humanity as a Objekt of Education**

By

Shinjurō NAKAMURA

## 1.

花を見たり、夕焼空をながめて、思いにふけるなどごく一部のものを除けば、およそ如何なる行為でも、それが人間の行為と称されるかぎり、〈何のために〉行為するかという特性をもっている。今これを普通一般の習わしに従って、その行為の目的とよぶならば、教育も人間社会のなかで人間によって営まれている活動である以上、必ず何らかの目的をもっている筈である。

では、〈教育の目的は何か〉。他の行為のそれとは異って、教育に特有な基本的目的は何か。このような問い方をした場合、たとえば、ジョン・デューイ John DeWey は、つぎのように語っている。すなわち、「教育の目的は、各個人をして自己の教育を継続させることにある。すなわち、学習の目的と報酬は成長に対する連続的能力である。ところでこの教育の目的は、人と人との交際が相互的關係にある社会及び平等の利害から生ずるいろいろの刺戟によって社会の習慣及び制度が改造されうような社会においてのみ初めて実際に適用されるのである。このような社会は、とりもなおさず民主的社会である。故に、教育の目的は、教育の過程そのものに求むべきものであって、教育以外のまたわ以上の如何なる他のもののなかにも求むべきものではない。」しかしながら、このような考え方に対して、対立するような考え方のあることを、デューイは次のように指摘している。「教育の過程のなかに目的を求めるのに対して、外部から教育の目的を立てようとするものもあるが、しかし外部から目的が立てられるのは、その社会の諸關係が平等的均衡を得ていない場合においてである。そしてこのような場合には、社会のある方面の人々にとっては、外部から課せられた目的を有することになるのである。換言すれば、それらの人々の目的は自己経験の自由な成長から生じたものではなく、自己とは離れた他の人々の目的のための手段であるに過ぎないものである。」

さて、われわれは、デューイの言及を手がかりとして、教育目的を設定する場合の二つの対立した考え方にふれてみたいのであるが、いずれにしても教育が人間社会の到る処で行われている人間の活動である以上、教育もまた何らかの意味で行為としての目的をもっている筈である。しかもこの場合、教育目的を設定する場合の考え方を明らかにすることが同時に〈何のために〉教育をするかというその目的の性格を決定することなのである。換言すれば、教育目的を設定する場合の考え方、つまり〈目的の立て方〉が明らかにされるならば、それに

応じて同時に何のために教育をするかということ、つまり教育という〈行為の目的〉が決ってくるということである。このような観念からすると、教育の目的とは、教育という行為の目的とその目的の立て方との総合概念を指すものと考えられる。従って、教育の目的を問題にすることは、教育という行為に特有な目的とその目的を設定する場合の考え方つまり目的の立て方を明らかにするという意味をもつことになる。

## 2.

まず教育目的の立て方には、デューイも指摘しているように、二つの対立した考え方がある。すなわち教育の過程そのもののなかに、人間の自由な成長に密着して、いわば〈人間の内部〉に教育目的を設定する考え方と、それと無関係に教育以外のまたは教育以上の他のもののなかに、いわば〈人間の外部〉に教育目的を設定して、人間をそこに近づけていこうとする考え方との対立がある。

では、このような対立した二つの考え方は、どこから生じてくるのか。デューイによれば、その社会における人間関係が「平等な相互関係」を得ているか否かということ、すなわち、その社会が民主的社会であるか否かによるものである。前者は民主的社会においてのみ初めて適用されるものであり、後者は民主的でない社会における教育目的の立て方である。そして、デューイ自身は前者の考え方に立つものであることは明らかである。

人間社会がまだ十分に民主化されていなかった近代以前においては、教育は特定の身分・階級の形成者をつくることを目的として行われた。農奴の子弟は農奴として、商人の子弟は商人として、職人の子弟は職人として、それぞれその分に応じその分を守りその仕事を効果的になしとげることができるように教育された。そのことによって、教育は身分的・階級的な社会の体制維持に寄与したのである。従って、そこでは個々の人間は体制のなかに埋もれた生産のための道具に過ぎないものであり、特定の目的のために役に立つか否かという角度から視られていたのである。わが国においては社会の民主化が欧米諸国に比べておくれていた。従って第二次世界大戦後に教育基本法が制定されるまで、教育目的の立て方が、その基調において近代以前の考え方に基づくものであった。この時代のわが国の社会と教育に対する批判の一つとして、与謝野晶子が1920年に発表した「人間性の教育」のなかでつぎのように語っている。「人間性を抑圧する社会では、人間はすべて奴隷化し機械化します。……今日の一般教育は実に人間性を抑圧している教育です。家庭教育と学校教育とがいずれも人間の独立を促すことのかわりに、人間を自己以外の何物かに隷属させることばかりを目的としています。」ここにわれわれは、わが国における当時の社会と教育に対する彼女の鋭い批判をうかがうことができる。殊に「人間を自己以外の何物かに隷属させることばかりを目的としています。」といるところは、人間の外部に教育目的を設定して、人間をそれに隷属させるという、当時の教育目的設定の基調に対する、彼女の激しい反論である。彼女は、当時の考え方とはまったく異なった、むしろそれとは対立する〈人間の内部〉に教育目的を求むべきであるという考え方に立っていたことは、「完全な個人を作ることが唯一の目的です。」と語っていることから明らかである。この「完全な個人を作ること」換言すれば、〈人間の完成〉が教育の唯一の目的であって、それ以外に教育の目的を求むべきでないという考え方が、わが国の教育の基調として確立されるまでには、その後、教育基本法の制定をみるに至るまで長い時間を費したのである。それは、わが国における社会の民主化がおくれたことによるものであるが、そこにまたわれわれは、社会体制と教育目的の立て方とに密接な深い関係があるということを知ることができる

のである。

教育の目的は、人間を何かのための道具に仕立てあげるのではなく、人間として完成させることにあるという考え方が成立してきたのは、近代以降のことである。しかもこの新しい教育目的の考え方は、新しい社会観とともに誕生してきている。たとえばフランス革命に思想的影響を及ぼしたと考えられる18世紀のフランス唯物論者エルヴェシウス（1715—1771）やドルバック（1723—1789）に共通する思想は、進歩の思想と理性への信頼とであり、これは時代を進める啓蒙思想の一特色をなしているのであるが、彼らはまた社会の幸福を知識の産物であるとし、従って無知こそ悪の根源であるとして、理性の支配を主張する。そして、啓蒙する教育すなわち、人間を理性的に自由することを重視する。ドルバックは、教育は改革のために奇蹟を行うと説き、エルヴェシウスは、個人の生活原理としての自利の追求と社会の原理としての最大多数の最大幸福との一致を説いて功利主義的社会観を展開し、この自利と公利の一致が善であり、この二つを一致させるものが個人の教育であると強調する。ルソー（1712—1778）もフランス革命に理論的影響を与えた。彼は彼の故郷であるジュネーブの市民共和国のような直接民主主義を理想としている。このような市民社会の担い手となる一般庶民の教育を彼はエミールのなかでつぎのように語っている。「自然の秩序の中では、人間はみな平等である……両親の身分にふさわしいことをするまえに、先ずもって、人間としての生活をするように自然は命じている。」人間に共通な天職は「人間であることである。」として、「私が生徒に教えたいと思っていることは、生きることである。」

ここにわれわれは、教育の目的を〈人間の内部〉に求めるという考え方の一つの源を見出すことができるであろう。しかし彼らは、新しい時代を目前にしてみな死んでいる。フランス大革命に直接参加したのは、コンドルセ Condorcet（1743—1794）だけである。彼が教育計画について論じた「公教育の全般的組織に関する報告および法案」は、1792年に国民議会に提出されている。その冒頭で教育の目的について、つぎのようにのべている。「自分の要求を充足し、幸福を保証し、権利を認識して、これを行使し、義務を理解して、これを履行する手段を、人類に属するすべての人々に供与すること、自分の才能を完成し、従事する権利を有する職務を遂行する能力を身につけ、生得の才能を十全に発達させるための便宜を各人に保証すること、またそれによって国民の間に平等を実際に樹立し、かつ法律によって認識されている政治的平等を実際的なものとする、国民教育の第一の目的はかくのごときものでなければならない。」

このように、近代における市民社会の成立期に示された民主的教育思想のなかに、教育の目的を〈人間の内部〉に求める考え方が誕生してきたのである。デューイは、この思想の流れの頂点に立つ一人として、教育はまっくれ人間の自由な成長に関することがらであるとのべているのである。また先にふれた、わが国の教育基本法の第1条が、教育の目的をつぎのように規定しているのも、このような考え方に立つものであることは明らかである。すなわち、「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたっび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」

### 3.

教育が人間そのものを目的として行われる。このような教育理念の確立は、近代以降における民主的社会の進行と軌を一にするということが、一応明らかになったとして、つぎに、では

一体そこに言われている人間とは何であるか。つまり民主的社会における教育が、目的とするところの人間とは何であるか。このように問いかけてみることによって、教育目的としての人間の検討を開始することにする。

〈人間とは何か〉このような問いのたて方をした場合、たとえば、ルソーの思想を受けついで偉大な教育者ペスタロッチ Pesta'ozzi, J. H. (1746—1827) はおよそ教育の何であるかを知るには、先ずもって、人間の何であるかを知る必要があるという意味のことを、その著「隠者の夕暮」の冒頭でつぎのように語っている。すなわち、「王座の上にあっても木の葉の屋根のかげに住まっても同じ人間、その本質からみた人間、一体彼は何であるか。何故に賢者は人間とは何かということをわれわれに語らないのか、何故に気高い人たちは人間とは何であるかを知らないのか。農夫でさえ彼の牡牛を使役するからにはそれを知っているではないか。牧者も彼の羊の性質を探求するではないか。……人間の本質をなすもの、彼が必要とするもの、彼を高めるもの、そして彼を卑しくするもの、彼を強くしたり弱くしたりするもの、それこそ人間の牧者にも必要なものであり、小屋に住む人間にも必要なものである。」

ここにわれわれは、教育の本質を人間そのものの育成にありとするペスタロッチの教育理念をうかがうことができるのであるが、このような考え方からすると、人間について知ることとは、同時に教育の本質を明らかにすることを含むものと考えられる。つまり〈人間とは何か〉と問うことは、同時に〈教育とは何か〉と問うていることにもなるということである。

ペスタロッチはまた同じ「隠者の夕暮」のなかで、「人間性のうちにひそむ諸力を純なる人間の知恵にまで、万人ひとしく高めることが、最も下層の人々をも含めて、すべての人々に共通な一般的、人間的教育の目的である。」

ここにわれわれは、ペスタロッチの人間教育の目的をうかがうことができる。このように人間を重視する立場からいえば、教育とは、進歩の基礎をあらわす一つの名称である。すなわち、教育とは、人間を現在の状態から、理想の状態にまで高める仕事である。ペスタロッチによれば、それは現在の状態である「人間性のうちにひそむ諸力」を理想の状態である「純なる人間の知恵」にまで高めることである。この意味で教育は未来にかかわってくることになる。カント(1724—1804)が、「人間は教育によってのみ人間になる。」といったのも、この表現における二つの人間という言葉のうち、前者は現在の状態における人間であり、後者は理想の状態における成熟した人間を意味することは明らかである。人間が人間になるのは決定的ではない。それは教育によってのみ可能であるということである。教育は人間社会のなかで、人間が人間を教育するのであって、狼少年の例によっても明らかのように、たとえ人間になる素質をもっていても、狼が育てたのでは決して人間らしい人間にならない。言語をもたないことは勿論、四つ足ではいまわり、夜になれば遠吠えするというまるで化け物のような少年にしか育たないのである。

ポール・ショシャール Paul Chauchard がその著「動物の社会・人間の社会」のなかで「人間はできたものではない。自分で形づくっていくものである。」とのべて、さらに「しかもすべてが人間を作る手助けをするのではない。人間を作る仕事には一つの方向がある。意識を高め、自由を向上する仕事だからである。」とのべている。ショシャールによれば、教育は人間の意識を高め自由を向上する仕事である。ペスタロッチによれば、それは人間性のうちにひそむ諸力を純なる人間の知恵にまで高めることである。またカントによれば、それは現在の状態における人間を、人間としてあるべき理想の状態の人間にすることである。いずれにして

も、その教育的思考のなかでの人間は二つある。それは、それぞれの表現に差はあるとしても、現状の人間と理想の人間とである。そして教育は現状から理想の状態へと人間性を高めていく仕事であるという点で一致している。この意味で教育は未来にかかわっている。従って教育はなんらかの意味で未来についての明確なイメージをもつことを要求されるのである。この理想の状態における人間が＜教育目的としての人間＞である、と一応言うことができるであろう。

この場合、現在の状態における人間に対して、理想の状態における人間すなわちわれわれが＜教育目的としての人間＞とよぶところのものが理想からの抑圧、あるいは未来からの圧迫になりはしないかという疑問が起きるかもしれない。

しかし、教育の目的が真に人間の内部に立てられているならば、そのようなことは起こりえないであろう。すなわち、現状の人間と理想の人間という二つの人間は、ただわれわれの教育的思考のなかに存在するだけであって、実存するのはただ一つの人間であり進歩して止まない人間性である。「人間性のうちにひそむ諸力を純なる人間の知恵にまで高める。」という人間性の進歩の過程においては、常にただ一つの進歩して止まない人間性があるだけである。ショッシャルもいっているように「人間はできたものではない、自分で形づくっていくものである」とするならば、人間が自己形成という行為を自覚して行為するところに、理想の人間、教育目的としての人間が生れてくるとでも言うべきであって、それは、他から課せられた目的でもなく、また現在の自分を抑圧する理想の人間でもなく、自らの行為の目的として、現在行為するなかで自覚的に認識されてくるものなのである。従って、＜教育目的としての人間は何か＞という課題は、人間性の進歩の過程、人間化の歴史のなかで明らかにすべき問題である。

#### 4.

ここでの問題は、教育目的としての人間、すなわち、人間が人間としてあるべき状態における理想的な人間とはどのようなものであるかということである。もっと平たくいってしまえば、＜人間らしい人間とは何か＞ということである。ペスタロッチのことはわかれば、「人間性のうちにひそむ諸力を、純なる人間の知恵にまで高めた」人間ということになるであろう。ペスタロッチが語るころの意味は、勿論一つづきのものであろうが、いま一応、その前段の部分すなわち「人間性のうちにひそむ諸力が、後段で語るころの＜人間らしい人間＞が形づくられる基底をなしていると考えることができるとするならば、＜人間らしい人間とは何か＞という問いを究明していくに当って、この問題に迫るための方法として、少くとも、つぎの二つの予備的な問題を検討しておかなければならない。

イ、 人間性という概念は、一般になにを意味するか。

ロ、 人間性は進歩するか。

ペスタロッチは、これまでもたびたびふれてきたように、「人間のうちにひそむ諸力」を「純なる人間の知恵にまで高める。」とのべている。

また、与謝野晶子は、「人間にもっとも大切な愛の本能と創造の本能……私はこの二つの本能を人間性と名づけます。——人間性は自由闊達に、かつ円満豊麗に展開し活動する本能です。またこれがあるために、人間の文化生活が進展し、増大してゆきます。」とのべている。

この問題について、現代のアメリカの代表的哲学者である、ジョン・サマヴィル John Samerville (1905～) は、その著「現代の哲学と政治」 PHILOSOPHY AND POLITICS TODAY の中で「このどちらの問題にもいろいろのこたえが可能であるが、わたくしは、哲

学上の立場にかかわりなく、だれでもみとめるこたえをのべることにしたい。」とのべて、さらにつぎのようにのべている。すなわち、「人間性というとき、人間性一般に共通ななにかが念頭にうかぶ。それはたんに人間に共通なものだけでなく、根本的、中心的なもの、一般に人間がそなえている力、能力、欲望といったものをふくんでいる。人間性についての真理をもとめるといふあい、その結論にちがいがあっても、いまのべたことが問題になっているといえる。すくなくともこのことをあきらかにすることが、人間性の問題をかんがえるのに決定的に重要である。そして、人間性という概念の基礎や意味をこのようにかんがえることには、異論がないであろう。」

ジョン・サマヴィルによれば、人間性とは、人間のもっている力、能力、欲望といったものをふくんだ、人間に共通な、根本的、中心的な人間の本性である。そして、人間性の意味をこのようにかんがえることには、だれも異論なくみとめるであろう。これまで多くの思想家が、いろいろの人間性の概念をつくりあげてきたが、それは、結局、方法論の角度からみて、人間のいろいろの行動を観察した結果をまとめたものにすぎない。例えば、アリストテレスが、「人間は社会的な動物である。」とか、「人間は理性的な動物である。」とかいったのも、要するに、アリストテレスが、人間の現実の機能と歴史を観察し、彼が観察したところをまとめて一般化したものである。

こういう事情であるから、過去におけるいろいろの人間性の概念について、どれが正しいか、詳細に比較検討して、この問題を厳密にかんがえることは、当面の問題全体からみて、それほど重要なことではない。従って、ここでは、ジョン・サマヴィルが、だれでも認めるであろうとしてさきにふれた、「人間性とは、人間のもっている力、能力、欲望といったものをふくんだ、人間に共通な根本的な人間の本性である」ということにとどめる。というのは、今日のわれわれにとって、人間性の問題が重要であるのは、むしろ、その現代的意味と内容についてである。すなわち、人間らしい人間とか、人間性の問題は、古くからの問題ではあるが、今日では、新しい問題として提起されているのであって、たとえば、「人間疎外の原因と、それからの回復」といったような問題にしても、現代的な意味をもった、新しく、ユニークな問題として、問われているのである。

所謂、人間喪失とか、人間疎外とかは、一体どのような意味をもっているのか。この問題は、いろいろの方面から指摘され、また論じられてもいるが、われわれが、たがいにみとめうる共通の意味は、およそ、つぎのようなものとかんがえられる。

すなわち、近代の機械技術がもたらした文明の進歩にともなって、一般的に人間の具体的全体としての根本的な本性がうしなわれ、人間性が破かいされ解体していく、そういう意味で人間の非人間化が生じてくるということ、平たくいってしまえば、人間にとってもっとも大切なもの、つまり人間の本性が次第に非人間的に失なわれていくということに他ならない。

現にわれわれは、そのような事態が、いたるところに存在しているということを実感することができるのである。このような事情から現代の特徴を一般的にあらわすことばとして、〈不安の時代〉ということばが、しばしば用いられている。あらゆる文化が、巨大な資本主義的体制によって支配され操作されていることによって、現代のわれわれは、新しく、ユニークな意味をもった生活不安や社会不安、そして戦争の不安、さらには生物全滅の恐怖にさえおそわれている。しかもこれらの不安は、結局いくら考えてみても自分ひとりではどうにもならないという全く絶望的な不安であるかのような絶望感さえ抱かしめるに至っている。

これまでの証拠からみて、〈種としての人間〉の発生は、おそらくせいぜい100万年か200万年前のことであり、その後、人間が文字を使うようになったのは、わずか6000年前のことにすぎないと言われている。人間が文字をもち、これを使わなければ、複雑な思考やすぐれた知的活動を発展させ、知識の体系や精密科学をうちたてることは、できなかったであろう。とすれば、このわずか6000年の間に人間が、ごく粗末な文字の発明からはじまって、今日の核分裂、核融合にいたるまで進歩してきたのである。人間が過去において、その本性のあらわれの一つである科学的研究の面で、このように進歩してきたとすれば、今後も、それは、歴史的に進歩すると言えないであろうか。事実、進歩の過程は停止したという証拠はすこしもない。そればかりか、現にわれわれは、生物学者のことばをかれば、生物学革命の幕明きの舞台のただ中におかれているときえいわれるのである。たとえば、ティラー G. Rattray Taylo はその著、「生物学的時限爆弾」The Biological Time Bomb (邦訳、「人間に未来はあるか」)のなかで、分子生物学に基礎をおいた生物学の最近における爆発的な進歩を、一つの「進歩の表」として提示している。この表は、はじめに、ここに記してある日付は、それぞれの項目が単に技術として完成する年を示したもので、一般の実用に供せられるようになる時期は社会的、経済的な理由でそれとはちがってくると前おきして、第一期1975年まで、第二期2000年まで、第三期2000年以後、に分けて、それぞれの項目を示している。すなわち、

第一期 1975年まで。

- 「四肢や臓器の移植の範囲拡大」
- 「人間の卵子の試験管内受精」
- 「生れる子どもの性の選択」
- 「精神変換薬」
- 「記憶の抹殺」など。(以下省略)

第二期 2000年まで。

- 「大規模な精神変換と人格の改造」
- 「完全な人工胎盤と真のベビー生産工場」
- 「冬眠」「若々しい活力の長期維持」
- 「人間と動物のキメラ」など。(以下省略)

第三期 2000年以後。

- 「老化のコントロール。寿命の延長」
- 「脳とコンピュータの結合」
- 「人間と機械のキメラ」
- 「死の無限の延期」など。(以下省略)

どの一つをとりあげても、非常にショッキングな内容のもとで、ティラー自身もいっているように、「生物革命は、機械革命つまり技術革命より、はるかに深く人間の生命に影響を及ぼしそうな革命である。」しかも、「理由はともあれ、生物学は『前線突破』という言葉をあてはめても決して誇張とはいえないような、テンポの早い発展段階局面にはいつてきた。」ということになると、まさに、ティラーのいっているように、「生物学的時限爆弾」である。

人間が、自分自身の手によってその肉体は勿論、精神も、さらには人格までも、自由自在に変えられてしまう可能性、そんな知識をもったものが、他人を勝手気ままに変えてしまうことになりはしないか。未来を起ころがままに放っておくことはできない。ティラーは、「もしも

生物学革命が、どこからも管理されずに進行するに任せられたとしたら、その結果生じた社会状態が20世紀の悲惨な状況をつくりだし……全世界が一つの大きな生物学的スラムになってしまいうだろう……しかもそれは、つかみにくいのでますます恐ろしいものである」とのべ、われわれがこれに対処して未来に生きのびるには、手おくれになる前に準備すべき、社会的、法的、政治的な問題をえぐり出して大声で提唱し、はげしく警鐘を鳴らしているのである。われわれは、そのなかに、教育的思考の客観的基礎として、重要な問題がひそんでいることを見のがしてはならないのである。

## 5.

人間性の進歩たとえ、それは一面のことにすぎないとしても、とにかく人間性の進歩が、それ自らの手によって、人間性の汚染、喪失、解体、所謂人間疎外の現象をもたらしている。これが、人間性にかかわる現代の状況であり、もともと深刻な問題である。

人間の意識が、今日の段階まで向上したからには、人間はもはや動物の段階には戻れない。しかし、人間は自らの運命を、自分で決定することができる。

科学、技術の進歩が、なぜわれわれを不安におとしめているのか。〈原子爆弾〉と〈生物学的時限爆弾〉、二つの爆弾を頂点とする公害文化からの脅威、なぜ、われわれはそれを恐れるのか。

このような知識は、どれをとっても、善用もされれば悪用もされる。人間が、新しい知識や技術を、どんどん手中に収めていくことは、それ自体、原理的には望ましいことであるとしても、実際に、人間はそれを賢明に使う知恵や分別をもっているのであろうか。あるいは過去において、しばしばそうであったように、それを誤って用い、産業革命の手痛い代価であった物質的スラムや化学物質による汚染に匹敵するような、生物学的スラムや生命の汚染をつくり出すのではなからうか。新しい力を誤用する問題以外に、生物学的知識のなかには、軍事的に有効なものがあり、または、あろうということが、事実であるというにいたっては、事故か故意によって起きる、きわめて重大な不慮の問題も考えられる。生物学の進歩がもたらす、このような新しい疑問と不安は、ティラー自身も、「わたくしは、この新しい疑問を大声で叫びたい。」とのべている。

ジョン・サマヴィルが、その「現代の哲学と政治」のなかで、シカゴ大学での原子物理学者のシンポジウムにおいて、核兵器のあの連鎖反応をひきおこすボタンを追いつめられたアドルフ・ヒトラーならば、おそらくおじたであろうというのが、みんなの意見であつたと紹介している。

ティラーは、「発展の成果は、みな等しく、悪意か、愚かさ、あるいはその両方によって、誤用されることがありうる。」とのべ、さらに、「精神をコントロールすることに関する知見を発表することについて、ある生物学者たちは、この知識が誤用され、*洗脳*とか、類似の目的に使用されるのではないかと恐れている。」とのべている。また、「ある種の知識は、少なくとも社会と文化の現在の発展段階では、人間にとってきわめて危険であると感ぜられるが、それは人間が新しい力を善より悪に使いたがるものだという考え方の上に立っているのであろう。あるいは多分、大勢の人が新しい力を……善用するより、むしろしばしば誤用するものだというべきであらう。」とのべている。

以上によって、明らかなように、ティラーによれば、われわれの不安の意識は、つぎの二つの上に立っている。すなわち、



イ、「社会と文化の現在の発展段階」。

ロ、「人間は、新しい力を、善より悪に使いたがるものだ」。

まず、現代の時代状況について、彼はその特徴を「二つの文化の分裂」とか、「二つの文化の亀裂」といっている。つまり、「社会学的な知識が、物理科学の知識に追いつけなかった。」ことから起こった失敗で、それは、科学者は、科学知識の応用のことは考えないで、応用は生み出す倫理的な問題は他の人が処理してくれると信じ込んでいること、そして一方、人文学者は、科学がつくり出す倫理的な問題の本質を評価することや、それらの問題の存在を理解することすらできないこと、によって生じてきた、いわば科学と倫理の亀裂である。

そこで、彼は、「道徳的、倫理的な問題を、解決する」メドがたつまで、「知識を人類の利益のために使うに十分な知恵」をもつまで、新しい知識を「生物学的アイス・ボックスのなかに凍結するか、それとも、社会が新しい条件に適応するようにあらゆる努力を傾けるかである」このことを社会に警告もし、政治的指導者に助言もしてきた。しかし、いかにすぐれた助言を政治的指導者にしても、その助言が実行に移される保証はない。「その後のことは、教育と破滅との競争に任せるより仕方がないのである。」と結んでいる。ここに、われわれは、教育が人類を破滅から救うことの可能性をもった最後のものであるという、彼が教育によせている大きな期待をうかがうことができる。彼が意味する教育は、「社会学的知識が、物理科学の知識に追いつけなかった」ことから生じた、現代社会における、倫理と科学との間の亀裂、跛行性の解消。

知識を「善より悪に使いたがる」人間の状態から、知識を「人類のために使うに十分な知恵、」をもった人間にまで高める。以上二つの内容をもっていると考えられる。前者は文化の問題であり、後者は人格の問題であるが、いずれも人間性の倫理的進歩に関わる問題である。

このような教育の可能性について、彼は「文化と人格との間の関係の理解が深まるにつれて、われわれは社会全体を、利己主義と他人に対する攻撃という方向から、協力と社会的良心という方向に転じていけると信じてよいような理由が、少なくとも少しはある。……人間社会は、この二つの極端の間はかなり広い範囲にわたって存在している。」とのべている。ここにわれわれは、ティラーが人類が未来に生きのびるために期待している教育の具体的方向をうかがうことができる。すなわち、＜利己主義から社会的良心へ＞。

## 6.

厳密に言えば、人間性は進歩するかという論争に決着をつけたのは、イギリスの生物学者で進化論者のダーウィン（1809—1882）である。

この進化論的立場から、ポール・ショシャルは、人間進化の歴史を「人間化」の過程としてとらえている。彼はその「動物の社会・人間の社会」のなかで、動物や原始社会との比較研究にもとづく豊かな事実をもとにして地上の歴史を総合し、人間進化の向上をつづけさせる歴史の方向を探り、つぎのようにのべている。「生物進化と歴史の間には明らかに近親性があるので、人間の歴史の第一段階の進歩を、知識と技術の発達によって、運ばれた進歩と定義することができる。」また、さらに、「生物の進化と同じように、歴史は雑然たる事実の集積に見えるが……複雑な生ける物質（人間）と進歩する技術と文化の全体を見渡す人には、歴史的現象の意味は明瞭である。まちがいなく意識の向上が続けられたということだ。」とのべ、そして、「このことは、科学と技術の知識に関しては、誰も承認すると思うが、道徳の分野については人間がまだひどく野ばんなので、それに異議をはきむことがあろう。じっさい、この方

面で最後の進歩をしなくてはならない。」とのべている。

ここに、われわれは、ショッシャルの「人間進化の二段階」の意味をうかがうことができるのであるが、それは、ティラーが語るところの、科学的発達に道徳的進歩が追いつけなかったことから生じている、現代社会における「二つの文化の亀裂」と同じ意味のものである。ところで、道徳に関して、ショッシャルは、つぎのようにのべている。「自由につきものの原罪とは悪に誘われ易いという意味であり、悪とは何よりも個人主義、利己主義、所有欲のことである。」人間化の道程で、常に、意識と自由の向上がつつけられてきた。従って「人間の段階では、行動しようという意識ではなく、行動の自由選択の段階である。」人間だけが何をなすべきかを考え、理解に努め、説明を求める。意識と自由の向上した人間は、新しい知識を善用することも悪用することもできる。人間の段階であるこの自由選択の段階で、「人間は悪に誘われ易い。」というショッシャルの言葉の意味は、ティラーが、「新しい力を善より悪に使いたがるものだ。」と語っているのと同じで、それは、ショッシャルのいうように、自由につきものの「人間の原罪」とでもいうべきものであろうか。

「動物の支配は、本能的調節によって、過度に陥らないが、人間的支配は、ただ一個人の利己主義に使われ易い。」と彼はいう。これは、「性欲や攻撃欲の狂乱など」とともにどれも動物的本能を人間的に悪変したもので——人間は自由であるから——人間の行動ではあるが、「人間的」ではなくて、ずっと「動物的」のものである。

そこで、ショッシャルは、「人間とは何か、人間的でないものは何か、どういうところが許せない過去の名残るか、そのうち仮りに許せるものは何か、完全に人間的なものとして認めるべきものは何か」を見抜き、そして、「本能的行動を意識して抑制して人間的な行為を昂揚し、過去の残存を解消して人間の進歩を続けさせるものを自覚する」ことが、人間が人間らしくなっていく所謂「人間化」の道程における「最後の進歩」の方向である。この意味で「人間らしい行動をするということが絶対の道徳である。」とのべている。さらに、「本能の制御ほど人間の品位にふさわしいものはない、」として、「人間教育は、この制御に向って進めらるべきである。」という。また、教育は、「人間から人間的でないもの、人間を不能にするものを、外部からの強制によらず自覚によって取除く仕事」への協力であるという。さらに、「人間は自覚によって進歩し……これが人類と動物をはっきり区別する基本になる。」として、「人間はできたものではない、自分で形づくっていくものである。」とのべている。

ここに、われわれは、教育の本質を「自覚による自己形成」にありとする、ショッシャルの教育理念をうかがうことができる。

「動物的本能の人間的悪変」の悪のもととは、何よりも利己主義、個人主義である。そこで動物的本能を制御して、人間らしい行動をするということが最高の道徳であり、人間化の歴史的な方向であると彼は語るのであるが、しかし、もしも、人間がこの意味での道徳的進歩すなわち最後の進歩を遂げることに失敗するならば、「やがて一大混乱が起こることだろう。あらゆる文化を破壊する原子爆弾によるか、人間についての誤った観念をもつかして、」そして「最後の大騒動が起これば、最後の進歩が行なわれるかもしれないが」しかし「それは全般的な失敗に終る危険があり、全世界のものが堪えがたい苦痛を受ける大混乱を避けることができないであろう。」とのべている。さきにティラーものべていたように「破壊か教育か」、それは現代社会における重要な選択である。

## 7.

「人間らしい行動をすることが絶対の道徳である。」としても、人間的なものと、そうでないものとは、およそのところはわかっても、行動の細かいことになるとなかなかきめにくい。日々<人間らしく行動する>にはどうしたらよいか。——ことに、相変らず古い動物的本能に誘惑され、その利己心は勝利をもとめて止まず、所有欲は利益を独り占めにし自分ひとりが物質的に文化的に豊かになろうとするとき、——それにこたえる既製の解決や公式はありえまい。それは、自分で探すよりほかにはないのである。<人間とは何か。>、<人間らしい行動とは何か。>と、人間の本性は、常に探求し、常に世界と自己に問いかけるものだからである。このことは、自分で気がつくことを覚醒といい、その人のあらゆる判断や感情や行動の主体として自己の運命の責任を自らになうものを人格とよぶとすれば、それは、<人格の覚醒>と称することもできるであろう。

それは、また、歴史的な<社会的良心>の声に耳を傾けることでもある。ここにいう社会的良心の声とは、常に<世界の平和と人類の幸福>を追求してやまない精神という意味である。歴史的な、というのは、<世界の平和と人類の幸福>を追求するという倫理的思考そのものが、実は「純なる人間の知恵」(ペスタロッチ)として、人間化の歴史の初期には実存していたはずのものであり、科学・技術の発達にともなって、人間がこれを忘れてしまったと考えられるからである。また、社会的良心といったのは、人類滅亡の不安にさえおそわれながらも、自分ひとり(近代的自我)では、どうにもならないという現代の社会状況のなかで、この近代的自我が自己批判をする。このようなぎりぎりの線まで追いつめられた近代的自我の自己批判のなかから、近代的自我の自己否定を媒介として、新しく甦ってくる自覚である。それは、近代の<我の自覚>としての個人主義的原理に対して、いわば、<我々の自覚>とでも称すべき、他とのつらなりをもった、その意味で社会的な、自我であり、人間が未来に生きのびるには、そうするよりほかはどうしようもないというぎりぎりの行動的必然性である。という意味である。

この意味での自覚、すなわち、人間らしく行動するにはどうしたらよいか、常に探求して止まない、<人格の覚醒それが現代教育の目的ではなかろうか。現代教育の本質は、このような自覚による自己形成であるというべきであろう。たとえ、この意味での自己形成という仕事に他から協力することも、また教育であるということがあろうとも。

以上、人間を重視する立場からすれば、現代の教育の課題は、利己的個人主義とのたたかいであり、人類の破滅とのたたかいである。

### 主な邦訳参考文献

- 松島鈞訳, 1969, 公教育の原理(コンドルセ), 明治図書出版株式会社、東京。
- 長田新訳, 1943, 隠者の夕暮(ペスタロッチ, J. H.) 岩波書店, 東京。
- 芝田進午編訳, 1968, 現代の哲学と政治(サマヴィル, J.), 岩波書店, 東京。
- 島崎通夫訳, 1970, 自然のなかの人間の位置(シャルダン, T. de.), 春秋社, 東京。
- 渡辺格他訳, 1971, 人間に未来はあるか(ティラー, G. R.), みすず書房, 東京。
- 吉倉範光訳, 1969, 動物の社会・人間の社会, (ショシャル, P.), 白水社, 東京。